

現代資本主義社会の現実把握のための二重の論理  
——世界社会フォーラムに關与するマルクス派の知的類縁性の探究——  
大屋 定晴（北海学園大学）

1990年代以降、資本主義的活動の領域的再編と金融化を伴う新自由主義的グローバル化が展開されてきた。この動向に対して抵抗運動も、社会的・地理的環境に応じて多様なかたちで生じた。これらの運動体を糾合させてきたのが、2001年から始まった「世界社会フォーラム」(以下、WSF)である。マルクスの思想に影響を受けた批判的諸思潮に限っても、トロツキストや世界システム論派など、広範な論者が社会フォーラムに關与した。そこには、多様な諸運動の同盟が反資本主義運動の必須条件であるという認識がある。新自由主義批判の潮流に身を置くマルクス主義者が、このような認識を共有するのはなぜか。また、それは、現代資本主義社会の展開に関する或る種の共通理解と關連しているのではないか。これが本報告の課題である。

ところで社会フォーラムに加わったトロツキスト系運動に一定の知的影響を与えた一人が、エルネスト・マンデルである。彼は1970年に、当時のアメリカ帝国主義の現状把握をめぐる論争にさいして、「普遍的な不均等複合発展の法則」を示唆した。そして資本主義発展の長期波動は、資本主義的運動法則の内的論理だけではなく、資本主義的生産様式が機能する社会的・地理的環境全般における非経済的・「外生的」要因——資本主義諸国の競争、征服戦争、階級闘争——の変化から、説明されると主張した。

以上のマンデルの議論は、マンデル派の思想家と一般的には異なるとされる他のマルクス派の議論にも影響した可能性がある。たとえば、世界システム論派のイマニュエル・ウォーラーステインは、WSFに積極的に参加し続けている知識人であるが、彼の著作は、記述的次元にとどまりつつも、非経済的要因である国家間体制と資本主義世界システムとの連関構造を重視し、また独自の長期波動論を展開しようとしている。

とりわけ資本主義発展の内的論理と、それと「外生的」要因の変化との媒介による資本主義の長期波動の展開というマンデルの主張は、WSF創設者の一員であるサミール・アミンの議論とも、似通うところがある。アミンは、16世紀以降のヨーロッパ重商主義時代における政治権力の分散化(前資本主義的な「貢納制社会」における「不均等発展」と中心部・周辺部への地理的分割とを、資本主義の歴史的分岐点として重視し、この点で世界システム論派と軌を一にする。しかし、彼の議論の特色は、①社会的組織内の諸審級の自律性と相互接合とにもとづく歴史の運動理解(「決定不全性 *sous-détermination*」)と、②「世界規模での価値法則」の貫徹——あるいは経済的審級による社会生活の支配(「経済主義的・重商主義的疎外」)——という資本主義社会の特殊性理解である。

アミンとマンデルには、その政治的主張に違いがあった。さらにアミンは、「不均等発展」という言葉を、体制変革の発端としての周辺部の評価に関わる概念として、限

《第3分科会》  
現代資本主義論

定的に使用している。だが重要なのは、人間の歴史に不確実性をもたらす諸審級（政治、経済、文化）の「決定不全性」と、現代資本主義社会における「世界規模での価値法則」の展開という二重の視点である。「決定不全性」による歴史理解は、世界システム論派における多面的な世界システム理解や「反システム運動」把握にもつながりうる議論である。だが同時に、「世界規模での価値法則」を看過しているとして、アミンは、ウォーラステインらを批判している。アミンは、マンデルと同様、資本主義発展の内的論理と「外生的」要因との、歴史的現実における媒介を主張しており、それゆえ「ヨーロッパ中心主義」という文化的課題をも自らの研究対象とし、体制変革における意識性の契機を重視してきたのである。

このように述べる事が可能であるとすれば、WSFを肯定的に評したマルクス主義経済 - 地理学者デヴィッド・ハーヴェイにも同様の共通性が看取できる。アミン＝ウォーラステインとハーヴェイとは、反植民地闘争の歴史的意義や、地理的編成を伴う資本主義の内的論理の理解などの点で異なっている。だが、現代資本主義を理解しようとするハーヴェイの広狭二義の「地理的不均等発展」論は、アミンの「世界規模での価値法則」と「歴史の決定不全性」とに通じるものがあり、ひいては、マンデルの資本主義発展の二重理解ともつながっている。ここに、WSF評価も含む現代マルクス主義派の知的類縁性があるのではないだろうか。